

今、言葉を覚えている子どもたちが壮年に達する二十一世紀後半、これらの国々は、どうなっているのでしょうか？ 漢字による筆談は、パソコンの自動翻訳に置き換わっているかも知れません。

話し言葉は、生まれてから十二歳までにほぼすべてが決まってしまうと言われています。読み書き

も、七歳から十五歳でほとんど完成します。母国語を覚える機会は人生に一度しかありません。そのことを思うと、子どもたちの柔軟な頭脳に日々吸収されていく母国語が、正確で豊かで美しいものでありつづけることを切に願わざるをえません。

(東京大学医科学研究所)

## とどまれなかった私

田中三保子

「とどまる」ということばから私が最初に思い浮かべたのは、私が「とどまることができなかった」と実感した保育体験である。私はE子に閉じこめられ

た。その体験も含めて、私はE子とのかかわりを「子どもが自分で乗り越えるとき」としてすでに書いたのであるが(本誌第九十一卷第十二号)、その

ときから十年以上経ってもなお、「とどまれなかった」思いとともに、そのことを鮮明に思い出すのはなぜだろうか。もう一度考えてみたいと思う。

年長組の十二月初めのことである。

E子が保育室にいる私を呼びに来た。「いいから来てよ。早く、早く」とせきたてられて、私は廊下を走っていくE子の後を追ひ、遊戯室に急いだ。行ってみると、遊戯室の真ん中近くにワッフルブロックで細長い囲いのようなものができていた。「おうちななの。R子ちゃんと作ったんだよ」「ずいぶん大きいのができたのね。お玄関はどこかしら」「ここだよ」。E子はブロックの一部を指し示すようにはずし、「入って」と言った。この時私には一瞬の躊躇があり、思わず「入ってもいいの」とことばが出た。「いいから入って」E子のことばに押しつけて、「おじゃまします」と言いながら、私は狭い入り口から中にもぐりこんだ。一面に敷き詰められ

たブロックの上に座り、「さあ、何が始まるのかな」と思った瞬間、E子ははずしたブロックを元に戻し、「入った、入った」とはやしたてるように言った。そして、ブロックの隙間から確かめるように私を眺めると、遊戯室から出ていってしまった。それまで、E子の「おうち」で接待を受けるものと漠然と思っていた私は、ことの成り行きにびっくりし、そして「閉じこめられた」ことを悟った。

E子の「おうち」にはいつものような家財道具は何ひとつ無かった。入るとき一瞬躊躇したのはそのせいだと思う。いつもと違う何かを感じたのだ。どの時点からかはわからないが、E子はおそらく私を閉じこめる意図を持ってこの「おうち」を作ったのである。そして私はその企図にはまってしまったのである。

E子は三歳で入園してきた。母親と離れたがらずそばにしているのだが、E子が周囲の遊びに気をとられている間に、母親は逃げるように帰ってしま

う。E子はとり残されたたと知ると、火がついたように泣き、抱きとめようとする私の手を払いのけ、母親を求めて走り、いないことがわかると地団駄を踏む。私は拒まれながらも何とか抱き上げ、E子の樂しめそうなものを探すことを毎日繰り返した。E子は砂場でごちそうを作ることを好んだ。そしていつも言う。「先生なんかにあげないよ」。やがて「先生だけにあげるんだから」と言ってくれるようになったが、また「先生なんかにあげないよ」と言い出すこともあった。年長になっても、私は時折、E子が私への親しみと反発の間で揺れ動くのを感じていた。

私を閉じこめてどうするつもりなのだろう。E子は何をしに行つたのだろうか、出て行つたまま戻つてこない。じつと待つうちに、私はちよつとむつとした気持ちになつた。「先生なんか信用しない」。時々頭をもたげるE子の思いを、何とか信頼に変えてもらうべく、これまでそれなりに心を砕いてきた

つもりであつた。砂場の道具を園庭に持ち出し、洋服を汚すと怒られると言いつつ、小砂利と土と水を混ぜてごちそうを作るE子の憑かれたような様子に、私は園で初めて外遊び用のままごと道具を調達したりもした。私なりに腐心してきたのに、これは何なのという気持ちになつた。少しの間E子を待つてはみたが、まだ戻つてこない。どうしようかと思ひながら立ち上がつてみると、囲いは案外低かつた。閉じこめられたという思いが、実際以上に高いものに思わせていたようだった。こんなに低いものならE子はほんのちよつとのつもりなのだろうかここにどまろうか、それとも乗り越えれば出られそうだから出てしまおうか、私は迷つた。廊下の方に目をやったがE子の姿はまだ見えない。私は結局乗り越える方を選んでしまつた。遊戯室の入り口へ二、三步歩いたところで、いつの間に戻つたのか背後からE子の声が出た。「何だ、もう出ちゃつたの」。私はことばにつまつた。確かに私の意志でE

子の企図から「出ちゃった」のだ。でも、それを素直には認められなかった。まるで囲いが低かったからとでもいうように「そう、でられちゃったの」と言うしかなかった。「なーんだ」。もう一度E子はがっかりしたように言った。

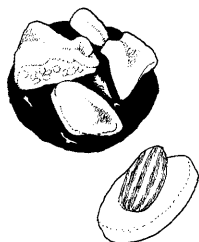
E子は、私が出てしまうとは思ってなかったようだった。出なければよかったという後悔と、E子の気持ちを裏切ってしまったことへの申し訳のなさが私の中にじわりと広がり、私はそれ以上E子と向き合うことができなかつた。焼き絵の様子が心配だからと自分に言い訳しつつ、逃げるように遊戯室を出た。

E子の私への反発は、おそらく母親への反発であろう。自分の意志とは関わりなく、母親の決めた路線を走らされてきたことへの押さえがたい思いが、今私に向けられているのだ、と理解しつつ、現実の生活の中でE子の強い反発に出会うと、私は、それが私自身に向けられているもののように感じて、落

ち込んだり反対にむつとしたりしてきた。

保育者はどんなに子どもの立場に立とうとしても、所詮権力を持つ者である。意識するとならないに関わらず、保育者の思いを押しつけている。E子は、そんな私に母親への思いを重ね、私の権力行使に逆らったり無視したりを繰り返してきたのではなかつたか。そして、今、まさに権力者としての私を封じ込めようとしたのではなかつたか。そのことに思い至らずに、私への否定的な気持ちの発現ととらえ、抗ってしまった。E子の「閉じこめたい」思いを感じとって、そこにとどまることができなかつた。私の気持ちは重かつた。

E子はもう一度私を閉じこめてくれるだろうか。もう一度閉じこめて欲しい。E子が私を閉じこめるには、遊びとは言え、かなりの心的なエネルギーを必要とし



たであろう。卒業まであと三か月、もう一度というのはとてもかなえない望みのように私には思われた。でももしそういうことがあれば、どういう状況であつても、今度はE子の気持ちに添い、そこにとどまろうと私は決心した。

二月の半ば、E子は再び私を閉じこめようとした。閉じこめられると直感したとき、私には覚悟ができていた。E子に素直に従うと、真つ暗闇の中に寝そべった格好で完全に閉じこめられてしまった。今度は簡単には出られない。「やった、やった」と言うE子の声を聞きながら、私には何の不安もなかった。どうなるのだろうかとも思わなかった。遊戯室の床はやっぱり冷えるわなどと感じたりしていた。そして、E子は「大丈夫」と私に声をかけ、思いのほか早く出してくれたのである。

卒業式の日、E子は私に向かって大声で叫んだ。「先生も一緒に小学校へ行こう」。私は嬉しかったが、とどまれなかった苦い思いを消し去ることがで

きないと悟った。E子はエネルギーシユな子どもである。だから、二度にわたつて私を閉じこめることができた。ほかの子どもであつたら、一度抵抗されて、なおもまたやつてみようと思うだろうか。自分を受け止めてもらえなかつたと感じて、私との間に距離を置くに違いない。

私が子どもに閉じこめられたのは、後にも先にもこのときだけである。けれども、この「閉じこめられてとどまれなかつた」体験は、その後私が子どもの心に添うことを考えるときの原点になつたような気がしている。

(元幼稚園教諭)